

# 清代地方演劇の社会的実態

——地方劇団と地方官、軍隊について——

村上 正和

## はじめに

清代中国演劇にとって、地方演劇は極めて重要な存在である。都市での演劇も、もともととは農村の祭祀儀礼に由来するものであり、そこでは、都市演劇とは異なる環境の中で、演劇や芸能が展開されていた。魯迅が短編小説「社戯」で、郷愁を込めて幼い頃に見た村芝居の思い出を綴ったように、地方での芝居上演は祭祀儀礼として、或いは地域の娯楽として、その地の人々にとって、なくてはならない文化であった。

これまでの清代地方演劇史研究では、主として宗族が注目されてきた。積極的に研究を発表してきたのは田仲一成氏で、近年では、都市文芸と農村文芸の相関図を描き、中国演劇全体の枠組みを提示している。<sup>(1)</sup> 祭祀演劇については、渋谷裕子氏も徽州文書を用いて、祭祀演劇組織の分析を行っている。<sup>(2)</sup> 陳志勤氏は、地域環境保全の観点から罰戯を取りあげ、<sup>(3)</sup> 磯部彰氏は、広汎な地域で戲台などの現地調査を行っている。<sup>(4)</sup> 地方演劇として著名な『目連救母』については、東アジア地域全体の中で捉えようとする野村伸一氏らの取り組みがある。<sup>(5)</sup> これらによって、清代地方

演劇を担ってきた人々や環境についての研究が進展していったといえよう。

しかし、清代地方演劇の社会的実態を考えると、十分に解明されていない基本事項もまた、数多く残されている。地方劇団や俳優も、その一つである。これまで、地方志や文集、筆記などの中には、地方劇団の実態が窺えるだけの十分な史料が少なく、議論そのものが困難な状況にあった。また、宗族や商人以外の主催主体も、十分に議論が深化していない課題である。

そこで本稿では、地方劇団の具体的な姿を確認し、主催主体として地方官と地方軍隊に注目したい。清代には各種の地方演劇規制が行われており、現在では、関連する史料集も編纂されている<sup>(6)</sup>。従来、地方官による演劇規制を地域社会との関わりまで踏み込んで詳細に分析した研究は少なく、弾圧として厳しく批判する見方も多い<sup>(7)</sup>。しかし、地方官は規制主体としてのみ、地方演劇に関与していたわけではない。本稿では、地方演劇中の地方官の役割について、特に劇団庇護という観点から考えてみたい。軍隊については、従来の清代演劇史研究では殆ど注目されてこなかった。しかし金文京氏が指摘するように、軍隊は演劇と密接な関係を持っており、清代地方演劇史研究においても、演劇を担う存在として捉えていく必要がある<sup>(8)</sup>。以上に基づき、本稿では従来とは異なる角度から、清代地方演劇の社会的実態を素描してみたいと思う。

史料としては、中央政府の檔案を用いる。檔案といっても、演劇史研究の中で著名な宮廷演劇の史料である「昇平署檔案」ではなく、録副奏摺等の一般の行政文書を用いる。その中には、地方劇団や俳優が関与した事件、俳優扶養によって官僚が処分された事件などが含まれており、有用である。地方檔案とは違い、特定の地域に密着した

ものではないけれども、俳優の供述などのこれまでにない貴重な情報があり、事例の豊富さによって全体像を描くことは可能である。

### 一 地方劇団の諸相と経済的実態

地方官や軍隊の庇護が、地方劇団にとつてどの程度の経済的な意味をもったのかを具体的に考察する前提として、本節では、地方官府の庇護を受けない一般の地方劇団と俳優の収入の実態について、いくつかの例をあげて概観しておきたい。

嘉慶年間、広西省の劇団長劉榮秀は、四川省重慶府出身の俳優、喻翠観を雇う。しかし喻翠観は自身の待遇に不満を覚えており、それがきっかけで、劇団の仲間である欧順観と揉める。その後、喻翠観は彼を襲撃するも、逆に殺害されてしまったのである。取り調べの中で、団長の劉榮秀は、以下のように述べている。

私は劇団の団長をしています。既に亡くなった喻翠観は、四川省重慶府の人で、新たに私の劇団に加入し、俳優をしていました。欧順観は、私の帳簿管理を手伝っていました。嘉慶十五年（一八一〇）六月十二日午前、私は欧順観と共に戲銭を皆に分配しており、一人頭銭六〇〇文を分けていました。喻翠観は劇団に入つて間もないので、銭四〇〇文しか渡しませんでした。すると喻翠観は私の分配が不公平だと罵り、欧順観が仲裁に入りました。喻翠観は、さらに欧順観までも一緒になって騙していると罵り、彼と喧嘩になってしまったのです<sup>(9)</sup>。広西省の劇団に、四川省から流浪してきた喻翠観が加入する。劉榮秀は、劇団員に一人銭六〇〇文を分配するが、

喻翠觀には錢四〇〇文しか渡さずに喧嘩となり、後に殺人事件にまで到つたのである。ここでいう「戲錢」が、月の給与か芝居ごとの報酬かは判断しかねる。しかし、人形芝居（傀儡戲）の報酬として、嘉慶二十年（二八一五）に陝西省で王長青という人物が、病癒祈願の酬神のために錢五〇〇文で雇われた事例がある。王長青も四川省岳池県の人で、傀儡戲の芸人として各地を回り、陝西省まで旅してきたのであった。<sup>(10)</sup>

劇団には、俳優だけでなく荷物持ちや雑務係もいる。乾隆四年（一七三九）、江西省で活動していた嘉慶班に荷物運びとして雇われていた人物の給与は、月に銀四錢であつた。<sup>(11)</sup>嘉慶年間、福建省の双蓮戲班で、劇団の雑務係が团长を殺害する事件が発生した。劇団の雑務係として、陳六六と林強強は月錢六〇〇文で雇われる。しかし、劇団の経済状況は悪く、給与の支払いは滞っていた。ある時、林強強は三月分の給与の支払いを求め、团长と争つたのである。<sup>(12)</sup>

以上の事例から、いずれも錢数百文という低額の報酬ないしは給与が確認できる。乾隆年間の浙江の風俗を記した『清俗紀聞』には、「雇役（にんぶ）は一日五十文七十文。また包飯（あちらめし）として自身に食事を備うる時は百四十文位より二百文くらい」と記されている。<sup>(13)</sup>日雇いの日給と比べても、上述の事例にあつた金額は相当に低いものといえる。

勿論、地域によつては、より高額の報酬を得ていた劇団や俳優もいた。例えば蘇州で人気の俳優ともなれば、収入はこの比ではなく、乾隆年間には銀七両三錢から銀三両六錢まで、その人氣に応じて五段階に分かれていた。<sup>(14)</sup>さらに、嘉慶年間の蘇州で新作の芝居を書き、劇団に渡していた人物は、上演のたびに銀六錢を受け取っていた。嘉

慶十二年（一八〇七）、蘇州の劇団による『寿椿園』という芝居の上演が問題になったことがある。この芝居は安徽省寿州で発生した殺人事件を踏まえたものであり、即座に上演禁止処分が下された。この『寿椿園』の作者は姚述生と毛文隆で、姚述生については不詳だが、毛文隆の供述が残されている。それによると、毛文隆はこの時六五歳、学問をするも科挙には合格せず、塾師として子供に勉学を教えながら劇団に自作の芝居を渡し、上演のたびに銀六錢を受け取っていたのであった。<sup>(15)</sup>安徽省の事件については、近年の事件を踏まえたなら、新奇なものが好まれる蘇州では成功すると考えてのことであつたと述べている。<sup>(16)</sup>この『寿椿園』は、二ヶ月の間に一〇数回上演されており、そのたびに銀六錢が渡されていたとするなら、毛文隆は合計するとおよそ銀六両ほどを得ていたことになる。劇団側は、人気芝居として当たることを目論んで、銀六錢を支払っていたのであり、作者側は注目を集めるために、実際の事件を題材に選んで、高額の報酬を得ていた。そうした行為がなされるだけの「市場」が、成立していたのである。その他の地方でも、例えば嘉慶年間に山西省で活動していた鳴鳳班は、道路修繕のための費用を拠出しており、それだけ安定した経営状況であつたことが窺える。<sup>(18)</sup>しかし蘇州の場合は、やはり繁華で芝居が好まれる地域ならではのことであり、山西省の鳴鳳班の場合も四〇年という長きにわたる活動を続け、郷紳を後ろ盾とする規模の大きな劇団であつた。<sup>(19)</sup>安定的に活動する地方劇団、或いは北京で華々しい活躍をする劇団がいる一方で、本節冒頭で挙げたような、郷紳や宗族、商人の庇護を受けておらず、経済的にも相当に低い水準にある劇団や芸人もいたのである。

## 二 檔案からみる地方官の劇団庇護

## 二一 地方官による移動の支援

清代地方劇団の活動にとって、移動は、劇団運営の根幹に関わる営為であったといえる。廟会にあわせて近隣の村々を回るにせよ、より広い地域を渡り歩くにせよ、移動しないことには、芝居の上演も行い得ない。しかし厳しい経済状況に置かれている劇団や俳優の中には、移動費用の工面に困る者もいた。例えば嘉慶四年（一七九九）、広東省のある俳優は船を雇って近隣の村を回るも報酬は少なく、船代には錢一〇〇〇文が足りなかった。そこで、後日芝居をした代金で支払うと約束するが、取り立てにきた船主ともみ合いになる中で、死亡してしまった。<sup>(20)</sup> 近隣の移動費用にも事欠き、自転車操業に近い状況だったのである。省をまたぐ広域的な移動をする劇団や芸人の場合、或いはより規模の大きな劇団の場合、移動はさらに大きな問題であったといえよう。

地方官の中には、劇団の重要な顧客になり、時に移動の支援を行う者もいた。地方官による支援の有無は、移動の難易に直結していたといえる。乾隆四十五年（一七八〇）、江蘇省呉県出身の俳優、呉桂林と金一元は、仲間四人と共に雲南で活動し、常に按察使汪圻の役所に伺候していた。ところが汪圻は安徽省へ転任することになり、俳優たちは帰郷費として銀二四両を受け取っている。<sup>(21)</sup> もしこの銀両がなければ、俳優らは雲南省にとどまっていた可能性もある。雲南での活動と、そこからの移動を、按察使汪圻に大きく依存していたと言えるだろう。

次に紹介する嘉慶十七年（一八二二）の事例は、地方官だけではなく幕友もまた、時に劇団や芸人の移動を助け

ていたことを示している。事件の顛末を簡単に述べると、四川省巴県の人、況啓元は江西省に商売に出かけるが、失敗してしまい帰郷できなくなる。そこで八角鼓（説唱芸能の二）を学んで生活していたところ、江西省南昌県の人、石文魁と知り合う。石文魁の娘婿の張春は、八角鼓を使った弾唱ができ、石家の義女である大鳳と小鳳に歌を教えていた。<sup>(22)</sup> しかしある時、張春が行方不明となり、石文魁は況啓元と協力して八角鼓を打ち、娘らをつれて売唱させることにする。江西省では収入も見込めないため、二人は石家の家族を連れて広州まで行き、日々歌唱をする。しかし上手くいかずに、江西省へ戻る途上、石文魁が病となってしまふ。<sup>(23)</sup> ここで石文魁は、妻方の一族を頼って一行から離脱する。残された況啓元は、大鳳、小鳳と歌唱を続けることになる。

（三月）二日、況啓元は大鳳、小鳳と一緒に、梧州府城外の船着き場で売唱していたところ、たまたま知府金標の幕友、羅修遠がそこで歌を聴きました。金標の幼子がそれを知り、四日と六日に、況啓元は大鳳と小鳳らを役所まで連れてこさせました。この時、知府は三日から巡船調査の公務に出ており、況啓元は役所で二日間弾唱し、羅修遠と親しくなりました。況啓元は旅費不足を理由に、旅先で頼れる相手の推薦を求めると、羅修遠は応諾して推薦書一通を書き、金標の子の金十三に梧州府知府の官印を取ってこさせて、装入して況啓元に与え、藤県へ行って県衙門に渡すよう言いました。一日、況啓元は大鳳らをつれて藤県の役所に行き、羅修遠からもらった推薦書を、署知県董邦本の門番である家人の張姓を通じて、当人に渡したのです。<sup>(24)</sup>

困窮状態にあった彼らを助けたのは、幕友の羅修遠であった。羅修遠は、恐らくは幕友としてのネットワークを使って署知県に彼らを推薦し、それによって、況啓元らの旅の目途がたったのである。これまで俳優や芸人の相互

扶助組織として、俳優ギルドが著名であつた。<sup>(25)</sup>しかし相互扶助といつても、共同墓地はあつても、外来の劇団のために、省をまたぐ旅費の支給まで行つていたわけではない。俳優や芸人の中には、郷里から遠く離れ、生産手段を持たない貧しい人々も多い。地方官、或いはその関係者による支援は、劇団や芸人の活動を大きく左右していたのである。

## 二二 処分事例の持つ意味

では、在地の劇団の場合は、どうであつたのだろうか。地方官が劇団や俳優を扶養すること、顧客として多額の報償を与えることは、明代から行われていた。これに対して、清朝は雍正二年（二七二四）に地方官の俳優扶養を禁止し、以後、この決定は各政権に引き継がれていく。実際に、地方官が俳優扶養や観劇によって処罰された事例も数多い。本稿ではこれら処分事例を史料として用いるが、その前に、史料の性格について簡単に触れておきたい。

演劇にまつわる処分事例の多さは、芝居愛好という趣味が処分理由になっているという点で、清朝の演劇規制を示している。また視点をかえれば、劇団扶養や俳優寵愛といった遊興や浪費は、地方官の腐敗を示しているともいえる。しかし処分事例は、単にそうした事実があつただけでなく、それが政治的に利用された側面があることを示している。俳優扶養や観劇によつて官僚が咎められる場合、別の要因があつて処分が行われていく中で、官僚としての不適格さを示す一環として報告されていた事例も多いのである。

一例を挙げると、嘉慶十年（一八〇五）に兩広総督那彦成を革職した際に、役所で毎月芝居を上演し、広東布政

使の広厚を招いていたことが問題になっている。<sup>(26)</sup>無論、芝居上演や宴会は些細な事であり、これが直接の理由となつて那彦成が処罰されたわけではない。原因は海賊問題への対応にあり、処分が行われていく中で、那彦成の官僚としての資質に対する否定的評価の一環として、この問題が取り上げられたのである。

また、こうした報告を生み出す要因である俳優扶養禁止も、演劇規制にとどまらない政治的な意味合いを持つてゐる。嘉慶四年（一七九九）に禁止が命じられたきっかけは、湖南布政使鄭源璣の失脚にあつた。取り調べの中で鄭源璣は、役所に芝居のできる者がおり、宴会の際には民間の劇団と一緒に演唱していたと供述する。<sup>(27)</sup>嘉慶帝はそれを踏まえて、改めて俳優扶養禁止を命じたのであつた。興味深いのは上諭の中で、各省の大官による宴会や観劇費用は民からの収奪によるものと指摘し、その上で「湖南地方はまだ激変していないが、四川や湖北の教匪が口実を設けて起こしている争乱が、これに起因しないとは限らない」（湖南地方雖尚未激変、而川楚教匪藉辭滋事、未必不由於此と、地方官による収奪と白蓮教反乱とを関連づけている点である。

この説明は嘉慶帝が親政を始め、和珅を断罪した時期の様々な政治問題に関わる上奏文に共通して、特徴的に見られるものである。和珅が不正な蓄財を図り、地方官は和珅に賄賂や付け届けをするために、州県から金銭を徴収する。州県はそれを民から収奪し、苦しめられた民（白蓮教徒）はついには反乱を起こす。こうした語り口が、嘉慶帝側の要請に基づくものであることは、既に山田賢氏の指摘される通りである。<sup>(28)</sup>そして鄭源璣もまた、和珅の一党と目されていた。<sup>(29)</sup>和珅の存在と地方官の貪婪、そして白蓮教反乱が結びつけられる中で、俳優扶養は貪婪な地方官の象徴とされ、嘉慶帝の親政開始を印象づけるために禁止されたのだといえよう。

以上のように官僚の演劇愛好は、政治的な文脈の中で、処分の口実として言及されることがあった。ただし、どういった政治的な背景があるにせよ、調査が命じられ、関係者の供述が取られ、個々の問題が決着されていたことには変わりはない。調査の中では、官僚だけでなく俳優の供述も記録されており、貴重な情報が含まれている。次節では具体例に即して、地方劇団の活動や、地方官と劇団との関わりを確認していきたい。

## 二―三 地方官と地方劇団

嘉慶十六年（一八一二）、湖北按察使の周季堂が革職された時にも、俳優扶養が問題とされている。<sup>(30)</sup> 周季堂が扶養していたとされた霓翠蘇班は俳優一人、雑用係等三〇数人の大劇団で、省城に行くことはあっても、常に按察使の役所に滞在していたわけではなかった。ただし、完全に没交渉だったわけではなく、「劇団内には蘇州の者がおり、朔望のたびに常に挨拶に出かけて」いた。<sup>(31)</sup> 周季堂は蘇州の出身であり、それ故に、俳優らは役所に入りしていたのである。扶養していないとはいっても、周季堂は月に二度の訪問を受けており、両者の関係は比較的密なものであったと思われる。ある時、周季堂は婿を迎えることになり、そのために霓翠蘇班に銀九六両を渡して、新たな衣装を準備させている。そして当日、劇団は芝居をした報酬として錢六〇千文と、あつらえた衣装を受け取ったのであった。<sup>(32)</sup>

劇団を丸ごと抱えるのではなく、劇団から数名の俳優を伺候させる場合もあった。嘉慶二十五年（一八二〇）、福建塩運使の福泰の悪行を記した匿名の掲帖が貼られ、騒動となる事件があった。事件は福泰に恨みを抱いた山東塩

運使郭庭輝の仕業で、掲帖に記された諸項目には誇張も含まれていたが、俳優に関する事柄は事実であったとされる。福泰は、運判の周世錦と役所で食事をした際に、金玉堂清音班所属の俳優、双喜を呼んでいた。<sup>(33)</sup> この双喜は福泰に花を贈り、その礼として銀一二両を受け取るなど、目をかけられていた。<sup>(34)</sup> 錢数百文をめぐる殺人事件が起きる一方で、花を贈って銀一二両を得る俳優もいたのである。さらに福泰は、自身のかわりに劇団長に歌童を雇わせようとする。

嘉慶二十四年（一八一九）二月、福泰は金玉堂清音班の団長、韓文秀に、自身の代わりに歌童を雇わせようとした。韓文秀は劇団内の俳優である双玉、双慶、双全、九齡を伺候させることにし、一人一年銀四〇両という条件を取り決めました。<sup>(35)</sup> 後に双玉らの吹唱が拙いため、嘉慶二十五年正月三日、福泰は一人銀一〇両を与え、韓文秀に引き取らせました。

福泰の依頼に対して韓文秀は、劇団所属の四人の俳優を、一人一年銀四〇両で伺候させる。劇団は、合計すると一年銀一六〇両の契約を結んだことになる。結局、その金額は受け取れなかったけれども、かわりに銀四〇両を得ることができた。周季堂と福泰の事例では、劇団が受け取った金額は、相当のものであり、地方劇団が普通に廟会や宗族演劇のために雇われても、一ヶ月でこれだけの金額を得るのは難しかったと思われる。なお、伺候させるのではなく、俳優を家人として用いていた事例もあり、道光十四年（一八三四）、広東省雷州府知府の王玉璋は、江蘇省上元県慶餘班の俳優を家人にしていた。<sup>(36)</sup>

第一節で紹介した劇団と比較すると、貧しい劇団は錢数百文の世界にあり、地方官を顧客にした劇団は、銀数十

両、数百両を手にしていたことがわかる。地方官個人と結びつくことで得られる銀両は、まさに桁違いのものである。

この格差は、地域の人々から劇団の「格」としてみなされることになる。劇団に対する人々の感覚をよく示しているのが、河南省開封府を舞台にした乾隆年間の小説『岐路灯』<sup>(37)</sup>である。『岐路灯』第九五回では、河南巡撫が学政らをもてなすために、劇団を呼ぶ場面が描かれている。門番（門上堂官）、伝達係（伝宣官）、警備係（巡綽官）の三人は、どの劇団を呼ぶか相談するも、蘇州からやってきた昆曲の劇団は旦（女役）がいまひとつで、とはいえ地元の芝居（大笛遼、小唢呐、朗頭腔、稻羅卷）では話にならない、地元にも若く美しい旦はいるが、劇団の規模は小さく衣装も粗末であると、結論が出ずに頭を抱える。その中で巡綽官は、各劇団から綺麗な旦を選抜してもてなせばいいと答えて、劇団に準備させることになる。しかし接待を受けた学政は芝居を好まず、『西廂記』の作者は「拔舌地獄」に落ちるべきと怒りだし、劇団は早々に退散させられてしまった。

第七八回では、地方官府に出入りする劇団と、そうでない劇団との格差が浮き彫りになっている場面がある。主人公の良家の青年である譚紹聞に子供が生まれ、母親の誕生祝いも兼ねて芝居を上演することになる。その時、薬屋と代書人が、この機会を利用して自分たちで劇団を雇い、芝居を上演しようと相談を始める。薬屋が蘇州の繡雲班を候補にあげるが、代書人は、「あれは大衙門に出入りしているから、ナマコや河魴の料理でないと食べない」、「老爺たちの御祝儀は、民間の一回の芝居費用ほどにもなる」などと反対している。地方官府に出入りする劇団と、そうでない劇団とは、その待遇に相当な開きがあり、地域の一般の人々にとっては、雲の上の存在と目されているのである。

たのである。

本節の最後に、女優の活動について附言しておきたい。これまで述べてきたのは男性の劇団であったが、女優もまた役所に入入りしていた。<sup>(38)</sup>乾隆元年（一七三六）、江南提督の南天祥が女優の取り締まりを求める中で、次のように述べている。山西省大同一带では、女優の活動は城市では見られないものの、農村で活動し、夜になれば化粧をして酒の席に侍るなど、「名前は梨園であるが、実際は娼妓」である。県内から追い出しても別の県で活動し、再び戻ってきてしまう。<sup>(39)</sup>この南天祥の奏摺からは、移動を繰り返して取り締まりを回避する女優の姿と、それに対する官側の苛立ちが看取できる。また、地方の茶館では女性による弾唱がなされることもあり、道光十九年（一八三九）、江蘇巡撫の裕謙は、茶館での女性の弾唱を禁止する告示を出している。<sup>(40)</sup>

このように女優や妓女の活動を禁止する者がいる一方で、役所に招く者もいた。道光元年（一八二一）には、直隸大名府知府の王履泰が女檔班（女優中心の劇団）を役所に呼んだことが問題となった。開封府同知の陸有恒が船上に宿泊していた所に、翠林女檔班が挨拶にやってくる。しかし陸有恒は外出しており、居合わせた幕友が唱曲をさせる。戻ってきた陸有恒は錢二〇〇文を与えて、女檔班を帰らせたのであった。<sup>(41)</sup>その後、陸有恒は王履泰のもとに挨拶に向いて食事をともにし、その時に先日の女檔班を呼びよせたのである。<sup>(42)</sup>この付近は清初より女優や妓女の活動が盛んな地域であり、早くも康熙年間には対処が命じられている。<sup>(43)</sup>この時も、直隸・山東・河南の境界には墮民の女檔班がいて、役所に入入りしていると明言され、同様に取り締まりが命じられている。<sup>(43)</sup>さらには、嘉慶十四年（一八〇九）に巡漕御史として視察を行っていた英綸は、妓女を呼んで芝居に興じ、さらに妾にしようとした

ことが一因で革職されている。<sup>(44)</sup> 北京では、女優の活動は認められていなかったが、地方では活動しており、地方官は彼女らの顧客になっていたのである。

### 三 駐防八旗・綠營と地方演劇

前節では、地方官と地方劇団との結びつきを、具体的に示してきた。しかし、清代地方演劇の有力な主催者として、宗族や商人に地方官を加えるだけでは、不十分である。本節では、さらに軍隊に注目したい。駐防八旗や綠營といった清代の軍隊と演劇とは、一見すると関わりのないように思えるが、実際は劇団や俳優と深く関わっていた。<sup>(45)</sup> その関与の仕方は、武官個人が、地方官の場合と同様に劇団や俳優を好む場合と、軍隊という組織的な性格が反映されている場合と、二つに分けられる。

最初に武官個人の場合についてみると、例えば乾隆四十四年（一七七九）、杭州將軍（駐防八旗）の富椿は、日々觀劇にふけり、彼に伺候する劇団は「將軍班」とも呼ばれていた。<sup>(46)</sup> 嘉慶六年（一八〇二）には、黑竜江將軍、景燾が地元の人形劇（偶戲）の一座を呼び、さらには、流刑になっていた人物を呼びよせて昆曲を教えさせている。<sup>(47)</sup> 道光十年（一八三〇）には、盛京將軍の奕顥が役所に劇団を呼び、芝居をさせていたことが問題となった。瀋陽にはもともと弋陽腔の劇団が二つあり、新たに徽州の劇団がやってきて活動していたが、この事件を期に全て追放されてしまっている。<sup>(48)</sup>

影絵芝居の芸人の事例としては、直隸密雲県の副都統（駐防八旗）であった阿隆阿に関する次のような記録が残っ

ている。阿隆阿は北京にいた頃、影絵芝居の芸人であった王二をよく家に呼んで演唱させ、さらに芝居道具一式を京錢八〇吊で買い与えていた。阿隆阿が密雲に赴任すると、王二は彼を訪ねていき、役所で二日間演唱して、報酬として京錢二四〇〇文を受け取っている。<sup>(49)</sup> 第一節で取り上げた陝西省の傀儡戲の場合、その報酬は錢五〇〇文であった。一方で王二は、道具まで買い与えられ、さらに二日間で京錢（制錢五〇〇文で一吊と数える）二四〇〇文を得ていたのである。

武官が歌手を雇うことで、金錢を得ていた事例もある。嘉慶二十四年（一八一九）の北京で、宗室哲林の通報によって、劉二という人物が捕らえられた。この劉二は直隸滄州の人で、四八歳、前門外の宿屋に居住し、小曲で生活していた人物である。<sup>(50)</sup> 取調べの中で、広東副都統の張秉枢が、劉二を雇って赴任先で歌唱させ、金錢を得ていたことが発覚する。

前任の広東省副都統張秉枢は、劉二を小曲の歌い手として雇い、赴任先で歌唱させ、得た金錢は均分することになっていました。張秉枢は病のため京師に戻ることになり、劉二に分給すべき銀一五〇〇両のうち、ただ銀四〇〇両を渡しただけで、残りは未だ支払っていませんでした。彼が北京に請求しにいったところ、宗室哲林は訛詐と罵り、殴打しました。<sup>(51)</sup>

哲林と、副都統張秉枢は同院に居住しており、それ故に哲林は劉二を殴打して、歩軍統領衙門に通報したのであった。この劉二が張秉枢に雇われたのは、嘉慶十七年（一八一二）のことであり、それから七年ほどの間に、劉二の取り分は銀一五〇〇両もの大金になっていたことになる。この供述は信憑性のあるものではなく、刑部でのさらな

る取調べが命じられている。その詳細は不明だが、結果として張秉枢は、劉二を使って金銭を得ていたことを理由に革職された。<sup>(53)</sup> 金額については、劉二が銀四〇〇両を得ていたと上諭に記されている。<sup>(54)</sup> 恐喝していたにせよ、銀四〇〇両という桁違いの金銭を得ていたのである。

つぎに、軍隊としての性格が反映されている事例を取り上げる。軍隊の場合、特徴的なのは外来の劇団を雇うだけでなく、麾下の兵士に芝居をさせていた点である。乾隆十六年（一七五二）には、広西省潯州協中軍都司（綠營）、林煥章が役所で兵士に芝居をさせたことが一因で革職されている。<sup>(55)</sup> 翌年、貴州の長寨營中軍守備（綠營）の劉天福もまた、兵士九名の子供に役所内で芝居をさせたことが一因となって革職されている。<sup>(56)</sup> 道光三十年（一八五〇）、江西袁州協副將（綠營）の達崇阿は役所に劇団を呼び、兵士や息子に共演させていた。<sup>(57)</sup> これらの事例の中でも、乾隆十一年（一七四六）、広東省三江協で生じた事件は、特に興味深い。広東三江協副將の魏明と中軍都司の耿蕙が、兵士で劇団を組織し、しかも民間で活動させていたのである。

該協の兵士謝有貴はもともと俳優出身であり、魏明は年幼の兵士張文俊ら一九名を選んで、彼に彈唱を教えさせていました。耿蕙はまた魏明におもねり、芝居道具を購入し、役所で芝居をさせて、ついに劇団としました。地元の一般の酬神でもまた、縦に舞台で芝居をさせていました。<sup>(58)</sup>

軍隊での芝居上演は、組織内だけに留まるものではなかったのである。勿論、軍内部で外来の劇団を用いての芝居上演もなされていた。乾隆十三年（一七四八）には、徽州營の守備が病愈祈願と盜賊逮捕の酬神のために、二度にわたって劇団を呼んで芝居を上演させている。<sup>(59)</sup>

俳優を軍隊の一員とし、給与を支給する事例も清代を通じて散見される。雍正二年、俳優扶養を禁じる上諭の中で早くも、総兵（綠營）が俳優を軍隊に入れて、給与を与えていたことに言及されている。<sup>(60)</sup> 嘉慶十年には、総兵の書成が役所で芝居を上演し、俳優五名に給与を支給していたために革職された事件がある。<sup>(61)</sup> 書成は自身の誕生日に芝居を上演し、俳優らに兵丁として自分に伺候するよう求めたところ、俳優らは、武芸はできないと難色を示す。しかし、芝居をするだけで訓練などは不要と言われ、俳優らは入隊を了承したのであった。<sup>(62)</sup> なお、嘉慶十三年（一八〇八）には伊犁のような周辺地域での劇団の活動が、軍隊の風紀に悪影響を与えると問題視されている。<sup>(63)</sup> この後、各地域から劇団や劇場が存在しないことを報告する奏摺が、毎年出されることになる。ついで嘉慶十九年（一八一四）の上諭では、俳優を入隊させないよう述べられている。<sup>(64)</sup>

さらに、芝居道具の貸与を通して、地方劇団から金銭を得ていた者もいる。乾隆六年（一七四一）には福建省の遊撃（綠營）の孟勇が、外来の劇団に強制的に芝居道具を租賃させて、錢二四〇文を徴収していた。<sup>(65)</sup> 乾隆十三年、江蘇省鎮江府で参領（駐防八旗）の許英が、自身の医療費と称して銀一五〇両を兵士等に要求した。協領朱国槐は兵士から銀両を集めると、その一部を用いて芝居道具を揃え、劇団に貸して金銭を得ていた。<sup>(66)</sup> 彼らは地元の実力者として、在地の演劇に影響力を発揮していたといえよう。田仲一成氏によると、明末には、芝居上演を請け負う包頭人が出現していた。<sup>(67)</sup> 劇団の活動を左右していた孟勇や、劇団に芝居道具を貸し付けていた朱国槐は、演劇組織そのものを運営していたわけではないが、包頭と同様に、地元の演劇に強い影響力を発揮していたのである。

このように清代には軍隊もまた、地方演劇の一つの主体となっていた。地方官と同じように劇団を呼び芝居を上

演ずる者もいれば、兵士に芝居をさせる者もいたのである。檔案史料には具体的な演目は明記されていないけれども、軍隊という性格上、武戯があったと推測される。また、本稿で取り上げた事例では、個人的な娯楽目的のための芝居上演が多いが、白蓮教反乱や太平天国に関連した場合、戦死者の鎮魂目的で芝居を上演した可能性もある。この点については、今後さらに史料調査を行っていききたい。

### おわりに

清代、在地の経済的、人的基盤を持たない流浪する劇団の場合、一般的にその経済状況や、報酬は決して恵まれたものではなかったといえる。そうした中で、宗族や商人と同様に、顧客ないしは庇護者として重要であったのが、地方官である。清代には、地方官の俳優扶養が禁じられていたけれども、摘発された事例の数の多さは、それが常態であったことを示している。これまで、地方官は演劇文化を弾圧する側とされてきたが、実際には地方官同士の交際のために、或いは自身の娯楽や誕生日といった祝いの場のために劇団を必要としており、劇団もその需要に添えていた。そして劇団は、地方官を顧客にすることで、相当の金額を得ることができたのである。本稿では、地方官を顧客にした場合と、そうでない場合との経済状況の違いを例示したが、両者の世界は、まさに隔絶したものであった。

一方軍隊では、麾下の兵士に芝居をさせるなど、その集団性と内部での上下関係を利用した演劇活動を行っていた。兵士で組織した劇団が、民間の酬神の場で活動した事例もあり、また遊撃の孟勇のように、在地の演劇を取り

仕切っていた者もいた。従来の清代演劇史研究では注目されてこなかったが、軍隊は単なる顧客としてだけでなく、時に地方の演劇環境の形成そのものに与っていた重要な存在だったのである。

それでは、以上のような地方官、軍隊による観劇や俳優庇護は、在地の演劇にどのような影響を与えていたのだろうか。本稿では十分に答えられる準備はないが、清末貴州省の俳優を記した『黔山採蘭録』には、次のような記載がある。俳優の双彩は、同じく俳優の黒寿喜の芸を継承していた。そこで作者が、黒寿喜の芸の由来を尋ねると、「道光年間の安順府の某太守が教えたもので、だから京派を体得しているのです」との答えであった。<sup>(68)</sup>もとより検証が必要な逸話ではあるが、仮に事実だとすれば、貴州省安順府という北京と遠く隔たる地で、芝居好みの地方官が北京の芝居を教え、その技術が伝わっていたことになる。

本稿は特定の地域に的をしぼったものではなく、それ故に、演目や地域社会の構造を踏まえた分析は行い得なかった。しかし初歩的な考察にとどまるものではあるが、中央の檔案史料を調査して、地方劇団の具体像を提示し、地方官と軍隊が宗族と同様に、地方演劇を形成する主体であったと指摘することができた。今後は、各地域の社会構造を踏まえつつ、どのような形で演劇が成立していたのか、明らかにしていきたい。そのためには庇護というだけでなく、より地域社会の構造に沿った考察が必要である。例えば清代、河南省湯陰県では、岳王廟廟会の十日間の演劇費用のうち、四日分を県政府が負担していた。県は、牛馬税として徴収した金額の半分を芝居費用として、廟の会首らと共同で管理していた。<sup>(69)</sup>また、道光末から咸豊初頭にかけての山西省沢州府の俳優ギルドは、官戯の負担や、それによって発生するトラブルに対処するために設けられたものであった。<sup>(70)</sup>こうした事例の史料調査も含めて、今

後の課題としたい。

## 註

- (1) 田仲一成『中国演劇史』(東京大学出版会、一九九八)、同『明清の戯曲——江南宗族社会の表象』(創文社、二〇〇〇)など。相関図は田仲一成、小南一郎、斯波義信編『中国近世文芸論』(東洋文庫、二〇〇九)、四頁参照。
- (2) 渋谷裕子『明清時代、徽州江南農村社会における祭祀組織について——『祝聖会簿』の紹介(一)、(二)』、『史学』第五十九巻第一号、第二・三合併号、一九九〇)など。
- (3) 陳志勤『中国紹興地域における自然の伝統的な管理——王壇鎮舜王廟における「罰戯」・「罰宴」を中心として』、『東洋文化研究所紀要』第一五二冊、二〇〇七)。
- (4) 磯部彰編『中国地方劇初探』(多賀出版、一九九二)。
- (5) 野村伸一編『東アジアの祭祀伝承と女性救済——目連救母と芸能の諸相』(風響社、二〇〇七)。Qiao Guo, *Ritual opera and mercantile lineage: the Confucian transformation of popular culture in late Imperial Huizhou*, Stanford, Calif.: Stanford University Press, 2005. は、明末の社会状況を踏まえて『目連救母』を理解しようとする。
- (6) 王利器『元明清三代禁毀小説戲曲史料』(上海古籍出版

版社、一九八二)、田仲一成『清代地方劇資料集第一集・第二集』(東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター、一九六八)、丁淑梅『清代禁毀戲曲史料編年』(四川大学出版社、二〇一〇)。

- (7) これまでの研究では、清朝の演劇政策全体を羅列的に概観する論述が見られた。陳芳『乾隆時期北京劇壇研究』(文化芸術出版社、二〇〇二)、一三九―一四六頁など。丁淑梅『清代禁毀戲曲史料編年』は、清朝政府、地方官による弾圧を強調する。演劇史研究ではないが、岡本さえ『近世中国の比較思想——異文化との邂逅』(東京大学出版会、二〇〇〇)もまた、弾圧を強調している。これに対して現代中国研究ではあるが、佐々木衛『村の演劇集団の組織と活動』(同『中国民衆の社会と秩序』東方書店、一九九三)は、現地調査を行って地域内の社会関係を押さえた上で演劇集団の活動を分析した論考であり、極めて示唆に富む。
- (8) 金文京『戯考——中国における芸能と軍隊』(『未名』八号、一九八九)。
- (9) 小的是唱戲管班。已死喻翠觀、四川重慶府人、新来小的班内唱戲。欧順觀帮小的管理帳目。嘉慶十五年六月十二

日上午、小的同欧順觀把戲錢分給衆人、每股分錢六百文。因喻翠觀入班未久、只分給錢四百文。喻翠觀罵小的分錢不公、欧順觀在旁勸解。喻翠觀并罵欧順觀伴同欺侮、与欧順觀爭鬧。(杜家驥主編『清嘉慶朝刑科題本社会史料輯刊』天津古籍出版社、二〇〇八、一七七二頁)。

- (10) 據戶属李思智供、已死王長青是小的表兄、合小的都是四川岳池县人。……據凶犯陳奉供……王長青唱独脚傀儡戲營生。嘉慶二十年二月二十六日、小的因母親病愈、雇王長青唱戲酬神、講定錢五百文。(清嘉慶朝刑科題本社会史料輯刊』九九一頁)。

- (11) 寧都県民人楊駝背子在班擡箱、每月議定工銀肆錢。(中央研究院藏、内閣大庫檔案、070944-001. 乾隆四年二月十日)。

- (12) 已死趙得恭雇小的到双蓮班内佣工。每月工錢六百文、寄回養母親。小的与他平等称呼、并無主僕名分、素好無嫌。嘉慶九年四月八日、有同在班内帮工的林強強、向趙得恭支取三月分工錢、趙得恭乏錢未付。林強強必要支取、兩相爭鬧、扭結。(清嘉慶朝刑科題本社会史料輯刊』一三七七頁)。

- (13) 中川忠英『清俗紀聞』卷一(平凡社、一九六六)、一〇八頁。

- (14) 蘇州脚色優劣、以戲錢多寡為差、有七兩三錢、六兩四

錢、五兩二錢、四兩八錢、三兩六錢之分。(李斗『揚州画舫録』卷五)。

- (15) 據供小的毛文隆年六十五歲、幼年讀書未成、訓課童蒙度日、粗通詞曲。每年捏編幾齣戲文、給相好之班演唱、每唱一次、小的得銀六錢。(中国第一歴史檔案館藏、宮中檔硃批奏摺、04-01-26-0020-083. 嘉慶十二年三月一日)。

- (16) 至五月編成八齣、後統至十六齣、内原有三兩齣、与安徽案依稀彷彿之处。小的以為新聞必有人看、因素与錢百元相好商量、蘇州風俗尚好新奇、令其添買切模、冀圖招人耳目、多唱幾本、彼此也多得多得些銀錢餬口。(同前)。

- (17) 去年七八月間、在蘇城内外演唱過十數次。(同前)。乾隆年間の小説『儒林外史』第二回では、家庭教師として一年銀一二兩の契約が結ばれており、時代はやや降るが、毛文隆のような塾師にとって、銀六兩というのはかなりの金額であったといえよう。

- (18) 『太和奏鳴鳳班修路碑記』(馮俊杰等編『山西戲曲碑刻輯考』卷九、中華書局、二〇〇二)、四五二―四五四頁。

- (19) 『重修青蓮寺玄帝殿碑記』(同前書)、四五五―四五九頁。

- (20) 据林亜才供……小的平日撐船度日、与林潮奉同姓不宗。嘉慶四年九月内、林潮奉雇小的船、只裝載戲裝、往各村唱

戲後、因戲少転回、尚欠小的船錢一千文、約俟得有戲錢交給。十月二十七日早、小的探知林潮奉在浮州村演戲、前去取討、走到土神廟前遇見林潮奉向索前欠、林潮奉斥小的、不該當衆索討有失臉面、爭鬧起來、林潮奉就拿手內烟袋打傷小的齒門、小的用拳回打傷着他左肋倒地。時有張瑞秀、同林潮奉侄子林范容、經見救阻不及、不想林潮奉傷重過一会死了。(清嘉慶朝刑科題本社会史料輯刊、五〇四頁)。

(21) 據吳桂林、金一元供、俱係江蘇吳興人、唱戲營生。上年同夏漢成、施立茂、顧三觀、陳三觀到雲南唱戲、常在汪臬司署內伺候。今年因汪臬司調任安徽、賞伊等每人盤費銀二十四兩、伊等亦要回籍。二月十二日自雲南起程、那夏漢成們四人同到鎮遠分船各去。伊二人另坐船到常德。又雇坐蕭士英船、四月十五日到漢陽江面即被截擊。因常在汪臬司衙門伺候、路上希圖体面、所以船上掛這汪臬司旗号、並無招搖別情。(中国第一歴史檔案館藏、宮中檔硃批奏摺、04-01-0383-025、乾隆四十五年四月十九日)。

(22) 據管帶女伶況啓元供称、籍隸四川巴県、前往江西小貿折本不能回里、即学打八角鼓營生、与籍隸江西南昌縣之石文魁認識。石文魁生子石金凌娶媳涂氏。又生女石氏並早年在安徽含山縣地方用銀五兩買有四歲幼女大鳳、及抱養五歲幼女小鳳、均為義女。石文魁將親娘石氏招贅南昌人張春為

夫。張春本係打八角鼓彈唱小曲、並不会唱戲。曾教大鳳、小鳳習唱。(中国第一歴史檔案館藏、宮中檔硃批奏摺、04-01-0540-001、嘉慶十七年九月十八日)。

(23) 嗣張春外出未歸、不知去。向嘉慶十六年六月間、石文魁因貧難度、遂与況啓元合夥打八角鼓、并帶其女壳唱。因江西生意平常、不敷食用、聞廣東地方熱鬧、九月間石文魁与況啓元携帶大鳳小鳳及石金凌、石涂氏并張石氏、前往廣東。於十月二十五日、抵省城外、每日況啓元同石金凌、大鳳、小鳳赴各店舖并客船彈唱、所得錢文無多、不能糊口。仍搭船欲回江西、於十七年二月二十七日、行抵広西梧州府城外、石文魁患病。(同前)。

(24) 初二日況啓元同大鳳、小鳳在梧州府城外馬頭壳唱、適該府金標之幕友羅修遠亦在彼聽曲。至初四初六兩日、因該府金標之幼子聞知、喚令況啓元帶同大鳳小鳳等、至府署中。其時該府先於初三日查看巡船公出、況啓元即在署彈唱二日、因与羅修遠熟識。況啓元以行路之資即求推薦、羅修遠允允当写薦書一函、向金標之子金十三討取梧州府知府印封、装入交与況啓元、往藤縣投遞。十一日、況啓元即帶同大鳳等前往藤縣衙門、將羅修遠交薦書、交署臬董邦本管門家人張姓、投入董邦本。(同前)。

(25) 蘇州織造的俳優ギルド関与については、田仲一成『中

国演劇史』(東京大学出版会、一九九八)三九九〜四〇二頁が概略をまとめている。蘇州では、蘇州織造が俳優ギルドを通して在地の劇団を管轄する立場にあり、先述の寿椿園事件の際に蘇州織造舒明阿は、「再查凡在蘇戲班、遇出境生理、須在奴才衙門掛号告假、方敢遠出」(中国第一歴史檔案館藏、宮中檔硃批奏摺、04-01-26-0020-083、嘉慶十二年三月一日)と、蘇州の劇団が入蘇、或いは出蘇する場合、必ず蘇州織造衙門に報告すると述べている。

(26) 前因那彦成在粵東辦理洋匪、種種錯謬、並有与藩司広厚看戲飲酒之事。……其餘如看戲飲酒等事、雖訊問屬寃、猶其過之小者。(嘉慶道光兩朝上諭檔)第十一冊、嘉慶十一年正月初九日)。

(27) 朕閱鄭源璫供詞内称、署中有能唱戲之人、喜慶讌客、与外間戲班一同演唱。(嘉慶道光兩朝上諭檔)第四冊、嘉慶四年五月二十日)。

(28) 山田賢「官逼民反」考——嘉慶白蓮教反亂の「叙法」をめぐる試論」(名古屋大学東洋史研究報告)二十五号、二〇〇一)。

(29) 姜晟平日居官猶能自守、其未經參劾鄭源璫、亦以其交結和坤、不敢攀發。(嘉慶道光兩朝上諭檔)第四冊、嘉慶四年三月五日)。

(30) 朕聞湖北按察使周季堂在任蓄養優伶、終日演戲宴會。

(同前、嘉慶十六年九月初八日)。

(31) 查漢鎮向有寬翠蘇班、常到省城演唱。……臣等親提寬翠蘇班管班曹天泰、戲旦鄭金林訊問。據供班内脚色共十八人、連後場打雜人等三十餘人、落寓漢鎮掛牌壳唱、如過省演戲、即在客寓落歇、並不曾養在臬司署内。惟班内有蘇州人、每逢朔望常去請安。(中国第一歴史檔案館藏、宮中檔硃批奏摺、04-01-01-0531-021、嘉慶十六年二月五日)。

(32) 該革司惟称、我因上年贅婿入署、家鄉風俗向用樂人贊礼、須著綵衣。我一時高興、令寬翠班代買新衣八件、当給銀九十六兩、唱戲兩日共賞錢六十千、令他們添製行頭、並將新買綵衣一併賞給。(同前)。

(33) 據已革運判周世錦供称、去年十月間、在運署審案、福泰留飯旁有優伶。該參員未即辭出、咎寃難辭。(中国第一歴史檔案館藏、宮中檔硃批奏摺、04-01-35-0499-004、嘉慶二十五年五月二十日)。

(34) 據双喜供称、二十四年底、伊送福泰杜牡丹玉蘭。福泰賞銀十二兩。……並據福泰供認屬寃。(同前)。

(35) 二十四年十二月裏、福泰令金玉堂清音班内管班之韓文秀、代雇歌童。韓文秀將班内所包戲子双玉、双慶、双全、九齡送進伺候、說定每人每年包銀四十兩。後因双玉等吹唱

不佳、於二十五年正月初三日、每人賞銀十兩、令韓文秀領出。(同前)。

(36) 該員前此進京、聞其路過江蘇省、並帶有上元縣慶餘班之優人宋姓為僕、專為唱曲侑酒。(國立故宮博物院藏、軍機處檔摺件、06832、道光十四年六月二十六日)。

(37) 『岐路灯』は、河南省開封府を舞台に、主人公譚紹聞が遊興に耽つたため没落し、そこから改心して勉学に励んだ後の成功を描いており、小説中には芝居上演や地方劇団の活動に関する記述が多い。『岐路灯』中の演劇描写については、小山裕之「『岐路灯』に見える諸戯曲について」(『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第三号、二〇〇〇)が詳しい。

(38) これまでの研究では、清代中期よりも、清末における女優の活動が注目されてきた。ここでは田村容子「港からきた『女優』——民国初期の北京における「坤劇」について」(『海港市研究』第一号、二〇〇六)、張雯「近代上海における坤劇と女優」(『東洋史研究』第六十八卷第二号、二〇〇九)を挙げておく。

(39) 于是各專歌舞托名女戲、雖州縣城市未見扮演、而幽僻村莊居然聚集。此等女戲日則買弄優場、冀人歡笑、夜則艷粧陪飲、不避嫌疑。名係梨園、實為娼妓。……臣查大同各

州縣鄉村竟有如此女戲、地方有司非不查拿、但此地驅逐、彼即移住別縣、別縣不容、彼又仍回本邑、輾轉潛踪、往來靡定。(中國第一歷史檔案館藏、宮中檔硃批奏摺、0401101-0001-029、乾隆元年七月四日)。

(40) 一、男茶館中有彈唱詞曲者、不論有目無目、止準男人、不準婦女。(裕謙「勉益齋統存稿」卷十六、禁陋習各條示、道光十九年十二月)。

(41) 本年正月十一日陸有恒押運糧錢、抵大名具屬龍王廟地方、因水淺停泊起剥十二日、即有翠林班女檔、至陸有恒船上請安。陸有恒外出、其幕友即令唱曲、陸有恒回船賞錢二千金散去。十三日陸友恒往府署、拜望王履泰、留食便飯、並聲言兩人相對寂寞、令家人楊升伝喚女檔、陸有恒並未攔阻。楊升即告知門丁高捷、將女檔金福、玉福喚至署內唱曲、同聽至二更各散。(中國第一歷史檔案館藏、宮中檔硃批奏摺、0401120330063、道光元年三月四日)。

(42) 邇聞習尚紛靡、官常敗壞、未有如庠平一府。若是其甚者也如雞澤縣之柳下、永年縣之南胡、賈西岩村等處女戲雜沓、娼婦繁多、不止紳衿士庶破產招致、即文武官弁出入衙門、不特不行禁止、抑且流連暢飲、醉后狂悖。……為此稟仰該道照票事理、作速驅移大名道、將一切流來女戲娼婦、嚴檄各該地方官、尽行驅逐出境、不許仍前容留。(于成龍

『于清端公政書』卷五、幾輔書驅逐流氓檄)。

(43) 本日那清安等奏、審擬已革大名府知府王履泰等伝喚女檔在署聽曲一案。據稱大名府城接壤東豫常有女檔班、往來流寓等語。此等情民攜帶幼女、沿途売唱漁利、最為風俗人心之害。直隸山東河南境內、時有女檔班流寓、甚至出入官署、不可不嚴行禁止。著方受畴、錢臻、姚祖同各嚴飭地方官、逐加查察、如有女檔班在其境內、即行驅逐或遞回原籍、勒令改業、勿使輾轉流染以挽澆風。(嘉慶道光兩朝上諭檔、第二十六冊、道光元年三月初八日)。

(44) 朕聞給事中英綸巡視東漕声名狼藉……並私喚妓女、至署唱曲住宿。等語。当降旨令馬慧裕・吉綸確查具奏。茲據馬慧裕奏……至該巡漕經過汶上及在濟寧時、曾令家人並開茶舖之馬奉書喚妓唱曲住宿、皆有妓者之名、併欲買妓作妾、致令其母帶伊女逃避。等語。……英綸著革職拏問交軍旗大臣、会同刑部審訊、並著保軍統領衙門、將英綸家產查抄。欽此。(嘉慶道光兩朝上諭檔、第十四冊、嘉慶十四年四月二十日)。

(45) 綠營については、羅爾綱『綠營兵志』(中華書局、一九八四)、猶木野宣『清代重要職官の研究——滿漢併用の全貌』(風間書房、一九七五)が、駐防八旗については、任桂淳『清朝八旗駐防興衰史』(生活・読書・新知三聯書

店、一九九三)、定宜莊『清代八旗駐防研究』(遼寧民族出版社、二〇〇三)がそれぞれ包括的な研究を行っている。

(46) 詎伊調任杭州將軍以來、不惟不能教訓兵丁、伊反自求逸樂、每日聽戲、有名其戲為將軍班者。……富椿著革退將軍。(『高宗純皇帝實錄』卷一〇九五、乾隆四十四年十一月下)。

(47) 於嘉慶五年十二月十九日、借取正紅旗人元寶家之偶戲台、伝集本城戲班及善提偶戲人等、大鑼大鼓、在伊私署唱、至二十日夜間方止。奴才探知屬實、不勝駭悚恐懼之意、当即往阻、伊又面從心違、復用站車伝墨爾根偶戲、於正月初二日在私署演唱。……又因發往墨爾根之遣犯黃欽時、善於吹彈、私令馳駟來省、教習衆人崑曲。又十一日伝大戲、在私署唱至四更、三十三十六等日又演唱偶戲。(國立故宮博物院藏、宮中檔嘉慶朝奏摺、404005281、嘉慶六年正月十七日)。

(48) 朕聞盛京將軍奕額有演戲宴會之事、特命富俊等前往詳查。茲據奏稱沿途採訪輿論、知瀋陽城本有弋陽戲兩班、近又到一徽班。將軍府內時常演劇。此到省密訪相同、並查得該將軍服用一切諸近奢華、務耽豐美。副都統常明亦喜演戲宴會、性近奢靡。等語。……奕額、常明著交宗人府兵部嚴加議處。……著富俊即將盛京城內外所有戲班雜劇概行驅逐、

令地方官嚴行查拏。嗣後再不准潛行入境。〔嘉慶道光兩朝上諭檔〕第三十五冊、道光十年三月十六日。

(49) 至王二本係唱影戲。嘉慶二十三年、阿隆阿在京時、常喚王二至家演唱。嗣用京錢八十吊置買影戲器具一分、賞給王二。本年三月間、王二前往密雲、阿隆阿曾令其進署演唱兩日、賞給京錢二千四百文。(中國第一歷史檔案館藏、軍機處錄副奏摺、03-3969-009、道光二年閏三月二十九日)。

(50) 劉二供、我係直隸滄州人、年四十八歲、來京在前門外客店內居住、唱小曲為生。(中國第一歷史檔案館藏、軍機處錄副奏摺、03-2484-008、嘉慶二十四年正月二十六日)。

(51) 有前任廣東副都統張秉樞、令伊典雇小曲、跟隨赴任歌唱、賺錢均分。張秉樞告病回京、應分給伊銀一千五百兩、只給還銀四百兩、餘次未償。經伊往討、宗室哲林誣伊訛詐、將伊毆打。等語。(同前)。

(52) 十七年正月、廣東副都統張秉樞叫我典了唱曲的(同前)。

(53) 此案張秉樞典當歌童、携赴廣東任所、已有應得之咎。並令歌童出署歌曲獲利、寔屬有玷官箴。張秉樞現已告病回旗、著即革職。(嘉慶道光兩朝上諭檔〕第二十四冊、嘉慶二十四年二月初十日)。

(54) 劉二挾嫌訛詐、已得贓銀四百兩。復往恐嚇、並揪扭宗室、寔屬不法。劉二著加枷號一個月、滿日再發附近充軍。

餘依議。欽此。(同前)。

(55) 茲查得廣西潯州協中軍都司林煥章……更不時呼喚兵丁、進署彈唱、罔恤官箴。……這所參林煥章革職。該部知道。〔明清檔案〕第一七二冊、一七二四一、乾隆十六年五月十三日)。

(56) 茲有長樂營中軍守備劉天福者……。一查該備違例、現在諭令兵丁宋正朝等、匠教兵丁李治國等玖名幼子、於署內學唱戲文、以為小班、日每嗜酒作樂、兵丁含怨、長當沸騰。……這所參劉天福著革職。(同前、第一七八冊、一七八一、二七、乾隆十七年一月二十二日)。

(57) 查得該副將達崇阿並未自製戲具、惟時常傳喚戲班演戲、其子福壽與兵丁周雲騰、黃廷魁等隨同演唱。(中國第一歷史檔案館藏、軍機處錄副奏摺、03-2942-016、道光三十年正月三十日)。

(58) 緣該協兵丁謝有貴原係唱戲出身、魏明即挑選年幼兵丁張文俊等拾玖名、令其教習彈唱。耿蕙又曲意逢迎、置買行頭壹副、在署演唱、竟成戲班。地方百姓酬神亦縱令登台演劇。……這所參魏明耿蕙俱革職。餘著察議具奏。該部知道。(中央研究院藏、內閣大庫檔案、050448-001、乾隆十一年九月三日)。

(59) 議得參革徽州宮守備程繼洛、據原任安徽衛疏稱、乾隆

十三年八月初三日、先因程繼洛患病、其家屬許下神願、至病勢稍痊、佯吉林班于署中酬神。又九月十二日、程繼洛因該舉事主程念詔、汪治兩家盜案全獲盜犯、喚桂芳班于署內演戲敬神。〔成案統編〕卷三、儀制、國制期年內署中演戲成案)。

(60) 原任總兵官閻光偉、將伊家中優伶、盡令入伍食糧。遂致張桂生等、有人命之事。〔上諭內閣〕雍正二年十二月十八日)。

(61) 書成身任總兵大員、於挑補弁兵事宜並不秉辦理、竟將優伶充伍食糧。〔嘉慶道光兩朝上諭檔〕第十冊、嘉慶十年九月二十八日)。

(62) 嘉慶九年十一月二十二日、因係書成生日、署中唱戲。書成欲將優伶楊興隆、周玉林、黃文元、王鸞、陳鈞等五名、充補兵丁、常令伺候演唱、使義子胡志量向告楊興隆等、因不諳兵技、不愿入伍。胡志量告以祇須唱戲、無庸操演。楊興隆等應允。十二月十九日、書成遂將楊興隆等五人充補本檔案館藏、宮中檔硃批奏摺、04-01-08-0118-009、嘉慶十年十二月二十九日)。

(63) 伊犁現在有戲兩班、恐年復一年人數加增、引誘農家子弟、入班學戲。且將來駐防子弟漸習下流。請嗣後班中不許

再添一人、如有引誘入班者審明懲處。等語。……伊犁等處

有官兵、在彼駐劄係屬軍營、自當專務訓練、俾知學習技勇、敦崇習尚。何得有演戲等事。……該處既有戲班、焉有農家子弟及駐防官兵不受其引誘之理。此於該處地方官伍大有關係。不可不力加整飭。〔嘉慶道光兩朝上諭檔〕第十三冊、嘉慶十三年四月初一日)。

(64) 更或工匠縫裁廚役等項、侵佔名糧、甚至有以廚役優伶充數者。則額兵之內又復有名無實、尤當伍鉅弊、必應痛加革除。〔嘉慶道光兩朝上諭檔〕第十九冊、嘉慶十九年八月二十八日)。

(65) 又孟勇私置戲箱四担、別與戲子至松願租孟勇戲箱者、方許進城。每本戲勇孟取租錢二百四十文、有管箱兵丁陳兆龍可質。〔明清檔案〕第一〇五冊、一〇五一、一六、乾隆六年八月三日)。

(66) 仍有正紅旗協領朱國槐、參領許英、貪污成性、卑鄙難移。先是許英因患腳瘡、指稱醫藥之費、勒令本旗兵丁幫助銀壹百伍拾兩、以致小兵軋至拮据。朱國槐因而起意糾合屬下官兵、共行百金大会、朱國槐先勒肆會銀兩、製買行頭、賃與戲班、以規厚利。〔明清檔案〕第一五四冊、一五四一、五七、乾隆十三年閏七月九日)。

(67) 田仲一成『中國演劇史』(東京大學出版會、一九九八、

二二一―二二三頁。清代の包頭人の事例として、咸豐年間のある訴状の中では、「具告状人龐志乾……係直隸宣化府蔚州民。……因去歲六月有本州文生閻殿主率同村賀基、賀珠、文生高朋等包差訛詐演戲苛派等情、叫身父龐邦出大錢八十吊、後又索大錢十吊」(中国第一歴史檔案館所蔵、軍機處錄副奏摺、呈狀、03-153404、咸豐元年)と記されている。また、河北省安平県の生員李耀甲は、地元の実力者であり、芝居を利用して集めた金銭を自身のものとしていた。「李耀甲藉隸安平係屬生員。……村人斂錢唱戲、計圖從中漁利。……在莊按戶斂錢、共斂得京錢一百零八千文、除唱戲用錢四十錢外、餘皆李耀甲入己」(中国第一歴史檔案館所蔵、軍機處錄副奏摺、03-136902、乾隆五十六年五月)。

(68) 双彩探母、梅玉配二劇独領墨蘭心法、詰墨蘭伝所由来、乃道光年間安順某太守之指教、所以得京派也。(潛菴六公子『黔山採蘭錄』)。「黔山採蘭錄」は中国国家図書館所蔵。墨蘭とは、黒寿喜の字である。

(69) 田仲一成『中国演劇史』(東京大学出版会、一九九八)、二九五―二九八頁。

(70) 官戲負担とギルド設立の経緯について、「本属苦累不堪、而胥役更加舞弊、有一次祭祀而出票叫戲三、四班、挨次索取打点、終使一班支奉者。有此衙門已經出票、彼衙門又復出票者。紛紛滋擾、並無定期籌備。遂至写戲之家、或因失誤日期、糾衆搶箱、或因縛捆掌班而聚衆攢毆、幾於釀成案件者屢矣。小的等因在城內設立五聚堂寓處、顧覓班頭一人、支應差務、期於公私兩便」(「五聚堂紀德碑序」、馮俊傑等編『山西戲曲碑刻輯考』卷九、四七〇頁)とある。

〔付記〕本稿は、富士ゼロックス小林節太郎記念基金二〇一〇年度の研究助成に基づく研究成果の一部である。

(東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻

博士課程)